

血が止まりにくい時に受ける検査

血が止まりにくい時に受ける検査



日本臨床検査医学会
川合 陽子



精密検査
4) 出血時間
5) 血小板機能検査

表在出血スクリーニング
1) 血小板数
2) vWF
3) 肝機能

DICスクリーニング
1) 血小板数
2) PT
3) フィブリノーゲン
4) FDP・Dダイマー

精密検査
5) DICの検索
6) SFMC・TAT・PIC

精密検査
5) 凝固因子定量
6) 循環抗凝血素

深部出血スクリーニング
1) APTT
2) PT
3) フィブリノーゲン
4) 肝機能

スクリーニング検査で異常がないとき
1) 毛細血管脆弱試験 2) 第XIII因子 3) 腎機能



「血が止まりにくい時とは」
血が止まりにくいことを「止血困難」といいます。抜歯後に翌日まで血が止まらないとか、大した怪我でもないのになかなか出血が止まらないときのことで、お産の時に輸血を必要とするくらいの出血を起した経験もこれらに含まれます。ひどくなると、青あざなどの出血斑や口の中の出血や鼻出血・生理が止まらない・タール便が出るなどの症状が見られ「出血傾向」といいます。出血を引き起こす明らかな怪我や原因がなくても血が止まりにくい場合は、先天性または後天性の病気を疑い、検査を進めます。

【皮膚表面に青あざが出来るやすい時】
皮膚の青あざを「紫斑」といいます。青あざが、若い女性の膝や老人の手に見られる場合は余り心配はありませんが、ぶつけた覚えがないのに青あざが見られる場合は、血小板の数や血小板の働きの悪いことがあります。また、血を止めるときに糊の働きをするフォン・ウイルブランド因子(vWF)の異常のこともあります。検査としては、採血して血小板数やvWFを調べます。実際に耳たぶや腕の皮膚に小さな傷を付け、出血時間を測定することもあります。血小板数が正常なのに出血時間が長い時は、血小板機能を測ります。パッファリンなどの鎮静解熱剤を服用すると、血小板の働きを鈍らせるため

止血困難を来しやすくなります。肝臓や腎臓の病気のこともありますが、重い病気が隠されていることもあり注意が必要です。

【関節や筋肉内の深いところに出血するとき】
幼少時から関節や筋肉などの深い部位に出血を来す病気としては血友病が知られています。凝固因子の先天性欠損である血友病では繰り返し関節内出血のため関節の変形を来したりやすくなります。検査では採血して活性化部分トロンボプラステン時間(APTT)を測定します。延長していれば、因子量を定量し血友病などの診断が可能です。赤ちゃんの血便を見たときは、ビタミンK欠乏症を疑いプロトロンビン時間(PT)を測定します。お産で臍の緒を切ったあと出血が止まらないときは第XIII因子を検査します。後天性に凝固因子に対するインヒビターが発生し、凝固異常を来すこともあります。

【早期発見は可能なの?】
止血機構に関わる検査が異常となる重大な病気としては播種性血管内凝固症候群(DIC)が代表的です。敗血症などの感染症や白血病や癌の全身転移などで起きやすく、お産の時の合併症としても知られています。血小板数・PT・フィブリノーゲン量・FDPなどの検査を施行することで、まだ症状の出していないDICの前段階(pre-DIC)で発見し早期治療が可能です。とも忘れてはなりません。

血小板の働きを鈍らせるため

とも忘れてはなりません。